

## 学位論文内容の要旨

学位申請者	佐藤 嘉代子 【人間発達科学専攻 平成23年度生】 (平成29年3月31日 単位修得退学)	要 旨
論文題目	保育的雰囲気を支える「子どもと哲学する時間」 —保育園5歳児クラスの対話から—	<p>本論文は、ある保育園の5歳児クラスにおいて「子どもと哲学する時間」を設定し、そこで、どのような対話になされ、それによって子どもや保育士、そして園にどのような変化をもたらされるのかを、アクションリサーチによって探ることを目的とするものである。分析にあたり、ボルノウの「教育的雰囲気」を基に、保育する者とそれを受け入れる者との間に通いあう雰囲気を「保育的雰囲気」として捉え、保育実践を読み解く視座とした。保育時間の中で設定された「子どもと哲学する時間」の記録を、映像及び音声にて収集し、さらに保育士への半構造化インタビューを行い、それらの記録を主な分析の対象とした。</p> <p>本研究の結果については、二部構成で示されている。第1部は「子どもと哲学する時間の」対話内容の特徴について、第2部はその取り組みの過程で子ども、保育士、園の保育がどのように変容したのかを論じた。第一部の第1章ではフランスの幼稚園の実践に倣って、輪になって座る子どもたちの中央においたローソクから発展した、子どもたちの「火」の不思議についての対話を分析した。第2章では、「いのち」をテーマとした、ニミズムとセンス・オブ・ワンダーが混じり合う子どもたちの語りについて、第3章では子どもたちが事象を身体感覚で捉えて対話になされていたことを明らかにした。第2部の第4章では一人の園児に焦点を当て、その園児の変容が園長および保育士の変容をもたらし、さらに園全体の保育の変容に至った事例をとりあげた。第5章では保育士の役割と葛藤について、第6章では保育現場での受け止め方について検討した。これらの記録及びインタビューの分析から明らかになったことは、保育的雰囲気が「子どもと哲学する時間」を支えていたことである。逆に、保育的雰囲気が実現できないクラスでは、この時間を設定することそれ自体が困難であることも明らかになった。</p> <p>今後、「子どもと哲学する時間」を設定していくためには、保育士の養成及び研修が重要であることが示唆された。</p>
審査委員	(主査) 教授 小玉 亮子 教授 浜口 順子 教授 柴坂 寿子 准教授 刑部 育子 准教授 富士原 紀絵	